

前回に続いて、昔の名文を紹介する。出典は、羽生永明の稿本（本になっていない原稿）『南信』である。

## 子規忌・釣月忌

元禄の芭蕉、天明の蕪村と対して、明治の俳壇に明滅の孤灯を搔

き立てた者は子規其人である。子規の天才は天下の許す所、今くだくだしく言ふは愚かである。此人や久しき肺患に悩んで、遂に白

玉楼上の人となったのは三年の昔し、糸瓜の水の滴る頃であった。在世の時間は短かかりしと雖も、その一代に与へたる感化は偉大なるものあって、山の奥谷の底の飯田にまで争ふて余瀝を嘗めんとす

に同人中の白眉であった。明治の蕪村が子規ならば、釣月は飯田の子規である。子規去つて明治の俳壇に子規なく、釣月去つて飯田の俳壇に釣月なし。去年も今年も糸瓜は長く、枝豆は丸く、同人の駄法螺と共に変わらねども、大空に照る月の都に在る人は、涼しき眼光らして吾らを戒むるが如くに見られる。今年ばかりは雲に隠れて怪しくも雨さへ降りたるは、同人の進歩覚束なきを慨き給へるにやあらん。怒るさしめ、今同人の句を捧げて二子の霊に供ふ。

## 声に出して読みたい郷土の近代文学（二） 鎌倉貞男

る同人十数輩、年々に糸瓜の蔓の綿々と会合を続けて、亡き人の倂を偲ぶ殊勝さは、聊か俳人の趣きなきにあらずとも申すべきか。

釣月は子規より若く、子規より先立つこと二年にして、子規と同じ病に悲しき人の数に入りしが、子は確か

（句読点等、筆者）

右の文中、子規は俳句や短歌の革新を唱え

た彼の正岡子規（一八六七〜一九〇二）であり、釣月は郡内で俳名が高かった竜岡の木下釣月こと斉（一八六八〜一九〇〇）である。

この文の筆者は、野口愚然である。愚然こそ唯四郎は鼎の出身で、東京法学院を卒業後、久しく長野新聞に勤務したが、右の文章を書いた頃は南信新聞の主筆であった。文中の「同人」というのは、この愚然が主唱して作った「松聲会」のことである。同会には、他に北原痴山や木下木石等がおり、郷土の俳句刷新に大きく貢献した。例文は、軽快な筆致で書かれており、なかなか洒脱な趣がある。

とは言え、子規・釣月両者の忌に寄せた追悼文だけに、故人を追慕する思いを根幹に据え、二人の功績や讃辞を端的に述べている。従つて、本文は短いながらも、極めて簡潔明瞭に、しかも堅く形式張らずに、言わんとすることを必要十分に表現した名文と言つてよからう。実際にはこの後、子規と釣月それぞれ別個に、同人十二人の句が載せられているが、それは割愛する。なお、右引用文の原文は、明治三十七年九月二十八日発行の地方紙「南信」に掲載されている。



羽生永明の稿本『南信文学』（下伊那教育会蔵）